

人口の動き

1月末現在	
人口	6,870 (+6)
男	3,343 (-1)
女	3,527 (+7)
世帯数	1,550 (0)
()内は前月比	



No.44
3月号

発行人 川口町公民館長 清
保科
編集人 広井幸雄

『川口町青年団かわら版』

川口町青年団

例年になく厳しい寒雪のため冬にはいつて活動があまりにぎみになっています。しかし自分たちの住んでいる川口町という地域に青年の手で何かをしたい、何か身近にできることがあるのではないかと、という気持ちは若い人だけでなく、だれもが持つ純粋な気持ちはないでしようか。



そんな中から私たち青年団は、奉仕活動という一つを取り上げてみました。そして一月三十日に町内の三軒の一人暮らしのお年寄りの家庭を三グループに分かれて訪問し、屋根の雪おろしや家のまわりの雪のけをししたり、中にはいつてお茶を飲みながら世間話しや、一人暮らしの実態はどうなのかといった話を聞いてきました。

季節の話題
彼岸

何も知らない私たちが急に行つて迷惑ではないだろうかと思つていたのとは逆に、行つてよかったんだ、また機会があったら訪問したいという気持ちはなれたことは、とても意義があったと思います。

また二月五日六日と群馬県の名湖までスケートに行つてきました。青年団と川口YTMの共催という事で総勢五十名近くで行き楽しい一泊二日を過ごすことができたという事は、良き青春の一ページになるだろうと思います。青年団もこれから四月の総会に向けて団員を現在の八十名から、百名まで伸ばそうという事で、一人一人よびかけをしていきたいと思つていますが、今の川口町青年団の組織はすべて個人加入を原則としています。ですから自分の村に組織のない人でも気軽には入れるのです。自分ひとりの青年団にはいつて、より多くの若者と交流することにより何かを得て、二度とこない青春を少しでも有意義に楽しく過ごそうと思つて人は大いに歓迎します。青年団はいつていろいろものかと疑問を抱いている人も多いでしょうが、いつてみればきっと青年団に加入して良かったということになるでしょう。

「暮れも彼岸まで」というように、三月も二十一日ごろになると気温も上がり、もう、冬に逆もどりのことも少なくなり、現在の春分の日「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」という意義をもつております。

この日は、太陽が朝、地平線を出てから夕方地平線に入るまでの時間と、夜の時間が同じになることは知られておりました。この日を境にして後は日中の時間がだんだん長くなり春に向かうわけです。仏教では、昼夜の長さが同じになることが、仏教で尊ぶ「中道」に当たるのでこの日を彼岸の中道として祖先の霊を慰める法要を営みます。この行事の始まりは、桓武天皇が延暦二十五年に崇神天皇追善のために全国の国分寺に命じて、春秋二回七日間づつ金剛ハラミツタ教を読経させたのが国民の祖先供養の日となつたと伝えられております。仏教の国インド、中国にもない日本独自の行事ではありますが、一家そろつてお墓に出かけ、先祖にお参りすることは、他国では見られないわい行事といえましょう。

春まじか

春がそこまで やつてきた
ふきのとうが 蕾をもたげ
ねこやなぎがふつくら ふくらんだ
ときにはふぶく 雪の中
木の芽もちよつぱり ふくらんだ
雪わり草が 春はどこかと
ちっちゃな力で せいっぱい
雪の下でがんばる がんばる
ことりたちが さえずった
早くこいよと 春を呼ぶ
やがて山には まんさくが
野にはすみれや たんぽぽが
小川にやどじょうが 顔をだす
みんな待つてる 春がくる
ポカポカ楽しい 春がくる

昭和52年交通安全
年間スローガン

運転者向けのもの
「赤信号 老人
子供 白い杖」

歩行者向けのもの
「話合う 家族
で 事故のない
世界」

子ども向けのもの
「信号が 青で
もよく見てわた
ろうね」

表紙の写真について

昨年の暮れから現在に至るまで私たちが町民をいやというほど痛めつけてきた異常な寒雪で、心身ともにお疲れのことと存じます。ここで待つ心の中は、どなたも春の訪しれでしょう。春は、そこまでやってきているようです。小鳥たちの動きも何となくにぎやかになってきました。そんな気持を、一つの情報としてとらえたものです。

